

学会報告

人文地理学会大会

大橋 めぐみ

平成 18 年 11 月 11 日に 2006 年度人文地理学会大会が近畿大学で開催された。よく、「(人文) 地理学とはどういう学問ですか」と質問されて答えに詰まることがあるが、地理学は非常に多様な分野・方法論を含んだ学問分野といえる。地理学を大きく分けると、地形・気候・水文・植生・環境などの「自然地理」、経済・社会・政治・人口・都市などの「人文地理」、世界各地の自然・歴史・産業・文化などの総合的な「地域研究」、さらに、地図・リモートセンシング・GISなどの研究分野がある。

1925 年に発足した日本地理学会は上記の全ての研究分野を含んでいるが、1948 年に発足した人文地理学会は、人文地理を中心にしつつも、地域研究や地図学なども含む幅広い研究分野を対象としている。学会には、専門的研究者・大学教員だけでなく、地理教育の現場に関わる中学・高校教員や、大学院生・学生も多く参加している。

大会は、初日の特別研究発表は 2 会場で開催され 4 報告が行われ、個別研究報告は 5 会場で開催され 80 前後の個別報告が報告された。最終日には「政令指定都市とまちづくりの課題－チンチン電車で堺環濠都市と上町台地南端部をめぐる－」というエクスカージョンが行われた。

特別研究発表は、第 1 会場では、「LUCC (土地利用・土地被覆変化研究計画) の観点から見た日本と中国の都市化 (氷見山幸夫・北海道教育大学)」, 「水資源管理と地域性 (内田和子・岡山大学)」の 2 報告があり、資源管理に関する議論が行われ、第 2 会場では「パプアニューギニア－新しい地 (域) 誌をめざして－ (熊谷圭知・お茶の水女子大学)」, 「移民問題に表象される現代スペイン社会の

変動 (長岡顕・明治大学)」の 2 報告があった。筆者は第 2 会場に参加したが、フィールドワークのあり方、地誌を通じた調査地域への貢献のあり方について深い考察がなされており、非常に興味深く感じた。

個別報告は、地理学史、都市地理、郊外化などといった分野ごとに行われる。筆者が個別報告を行ったセッションは農業地理であったが、今回の農業分野の個別報告の傾向としては、全体的に学生の報告も多く、1 事例地域を掘り下げた詳細な分析が多かった。理論化の面で不足を感じる部分もあったが、一方で、過度な理論化を図らず、詳細なデータに基づいたリアリティのある報告も多かった。

農業分野と重なる分野としては、他にも、漁業地理、人口地理、福祉高齢化、海外研究などがある。観光地理や海外研究で農村ツーリズムなどもしばしば取り上げられている。今回は、流通および中山間地域振興に関する研究発表も多く行われていた。幅広い面から農業・農村地域についてアプローチがなされている研究大会であるといえるだろう。